

# 切迫流産患者の安静の指示と患者の行動について —切迫流産患者の安静保持を障害する因子の分析

## 2階西病棟

○松岡 美奈・櫛部 美和・公文 京子  
森光 真由・谷脇 文子

### I. はじめに

当病棟において切迫流産患者の多くは、流産の既往や不妊治療後の妊娠等の妊婦で、これらの妊婦は妊娠反応が陽性を示す妊娠初期の段階から入院による管理が行われ、安静を第一とした療養生活を余儀なくされている。安静にすることは、自覚症状のない妊婦にとっては身体的、精神的ストレスを感じる事が少なくないが、多くの妊婦は妊娠継続のために安静を守ることができている。しかし、少数ではあるが安静度を把握していなかったり、理解を示していても守れないという患者もおりその行動の差に注目した。

そこで今回、切迫流産患者の安静保持を障害する因子について、患者側の要因に焦点をあて分析を試みたので報告する。

### II. 研究方法

#### 1. 研究対象

平成6年1月1日～平成7年9月30日の期間において切迫流産にて入院し、安静治療を行った妊婦27名（初産婦21名、経産婦6名）

#### 2. 研究方法

1) 上記患者に対しカルテ検索を行い、以下の内容で調査した。

- (1) 属性 : 年齢、職業、学歴、性格、生活習慣、家族構成
- (2) 妊娠に関する事: 妊娠歴、不妊外来通院の有無、妊娠週数、妊娠中の行動、夫の協力
- (3) 安静に関する事: 安静度、自覚症状の有無、疾患に対する考え方、安静中の行動

2) 上記患者のうち、平成7年8月1日～9月30日の期間において入院中の妊婦7名に対し、入院中の安静行動に関する内容について記述式アンケート調査を施行した。

### III. 結果

#### 1. カルテ検索からの結果

不妊外来通院による妊娠の妊婦は27名中20名でこのうち19名は安静保持できており有

意差が得られた。(表1)

切迫流産徴候のある妊婦は27名中12名でこのうち8名が安静保持できていた。また安静保持できなかった妊婦5名のうち、症状出現により3名が安静保持できるようになった。切迫流産徴候と安静保持については有意差がなかったが、対象者の増加によってその傾向が強くなることが示唆された。(表2)

流産歴のある妊婦は27名中16名でこのうち15名が安静保持できており有意差が得られた。(表3) また流産歴があり切迫流産症状の出現した者は16名中7名でこのうち6名が安静保持できていた。症状出現のない妊婦9名はすべて安静保持できていた。(表4)

親との同居者は27名中10名ですべて安静保持ができていた。親との同居がない妊婦は17名で5名が安静保持できていなかった。親との同居がなく子どものいる妊婦は27名中4名で、すべて安静保持できていた(表5)。姉妹のいない妊婦は27名中15名で3名が安静保持できていなかった。

安静保持ができていなかった者は27名中5名で初産婦4名、経妊婦1名であり、初妊婦と経妊婦において明らかに有意な差があった。(表6)

又、切迫流産徴候の出現やホルモン値により頻回に安静度に変更され、安静度が何れもトイレ歩行可の時の妊婦が安静保持ができていなかった。

安静保持できていなかった妊婦5名を含む23名が安静に対する理解を示していた。

## 2. アンケート調査結果

安静度の説明は7名全員が入院時に受けており、医師から4名、看護婦から1名、医師と看護婦から2名であった。

安静度を理解できたと答えたのは6名で、残り1名は「安静度の内容が解らず、トイレ歩行のみであったが談話室まで電話をかけにいった」と答えた。

表1 不妊外来通院の有無と安静保持群  
安静非保持群との関係 n = 27

	通院(有)	通院(無)
安静保持群	19	3
安静非保持群	1	4

$$x^2 = 9.34 \quad P < 0.005$$

表2 切迫流産徴候の有無と安静保持群  
安静非保持群との関係 n = 27

	症状(有)	症状(無)
安静保持群	8	14
安静非保持群	4	1

$$x^2 = 3.14 \quad P < 0.1$$

表3 流産歴の有無と安静保持群  
安静非保持群との関係 n = 27

	流産歴(有)	流産歴(無)
安静保持群	15	7
安静非保持群	1	4

$$x^2 = 3.92 \quad P < 0.05$$

表4 流産歴有妊婦の切迫流産徴候の有無と  
安静保持群、安静非保持群との関係 n = 16

	症状(有)	症状(無)
安静保持群	6	9
安静非保持群	1	0

$$x^2 = 1.37 \quad N. S$$

表5 親と同居のない妊婦の子供の有無と  
安静保持群、安静非保持群との関係 n = 17

	子供(有)	子供(無)
安静保持群	4	8
安静非保持群	0	5

$$x^2 = 2.18 \quad N. S$$

表6 初妊婦、経妊婦の別と安静保持群、  
安静非保持群との関係 n = 27

	初妊婦	経妊婦
安静保持群	7	15
安静非保持群	4	1

$$x^2 = 3.92 \quad P < 0.05$$

安静を強いられ困ったことがあると答えたのは5名で、その内容として「買い物に行けない(3名)」、「電話ができない(3名)」、「排泄の苦痛(2名)」、「入院費の支払に行けない(1名)」が挙げられた。その他、病衣交換やシャンプーの希望があり、室内に冷蔵庫の設置を望む妊婦も少なくなかった。

また、安静入院中の気分転換として、他患者との雑談(6名)、読書(5名)、音楽鑑賞(3名)、外を見る(1名)が挙げられていた。

#### IV. 考察

安静保持は不妊外来通院歴や流産歴において有意差がみられ、また、切迫流産徴候の出現との関連性も示唆された。一方、安静保持ができていない背景として、初妊婦であることや安静度が因子として明らかとなった。

初妊婦が安静保持ができていなかったことは、妊娠経験がないため妊娠の予備知識が少ないこと、自覚症状のほとんどない早期からの入院であることなどから、母性意識の発達の未熟により妊娠を受容できず、安静の必要性が解っていても実行できないのではないかと考えられる。新道ら<sup>1)</sup>は「母親役割取得過程は、妊娠の自覚(計画妊娠の人はその計画の段階から)と同時に始まる」と述べている。

不妊外来通院歴のある妊婦は挙児希望が強く、妊娠継続に対し意欲的で、このこと自体がすでに母親役割取得へのスタートであり、そうでない妊婦とは入院時から明らかな差があると言える。夫も、妻の妊娠や出産に対する想いを理解しているため、妊娠継続のために入院している妻を肯定的に受け止めている。

また、流産歴のある妊婦のほとんどは入院経験があるため知識があり、初妊婦との意識の違いに加えて、「また流産するのでは・・・」という恐怖感がより安静を守ることに執着をもたらしたと考えられる。

しかし、初妊婦であっても、切迫流産徴候の出現により安静が守れるようになった例もある。切迫流産徴候は初妊婦にとって妊娠を確かなものに実感でき、妊娠継続への危機感を体験する一方で、症状出現は母性形成を促し、安静の必要性を再認識する動機づけとなっているといえる。

安静度については、トイレ歩行の安静度の患者が安静保持できていない結果が得られた。アンケートからもトイレ歩行という安静度は、ベッド上安静やポータブル安静に比べてその範囲が曖昧であることが伺える。さらに、スタッフの安静度の具体的な内容の説明不足が加わり上記の結果を招いたと考えられる。

家族構成が夫婦のみと夫婦と子どもの場合、前者が安静保持できていない頻度が高か

った。このことは、妊婦の安静療法に対する夫の理解度に加え、夫のみでは十分なサポートが得られない状況が推測される。一方、後者の場合は、子どもの存在により妊婦の親や夫の親等のサポートが得られやすいこと、子どもと妊婦の面会など家族との接触の機会が多くなることが推察される。したがって、アンケート結果にあったように、安静中の妊婦が望む買い物の代行や家庭内の情報を得ることもでき、家族と面会することで精神的安定が得られ、ストレスの軽減につながることが考えられる。

安静中の妊婦自身の気分転換として同室者との雑談を挙げている妊婦がほとんどであった。切迫流産患者は当病棟では同室になることが多い。患者同士の雑談は妊婦のストレス緩和となるとともに、情報交換により、切迫流産妊婦として必要な知識を得ることもなる。同室者との関係は妊婦の自覚を促す上で、私たちが考える以上に重要な位置を占めていることが予想される。

## V. まとめ

切迫流産患者の安静保持を障害する因子として次のことが明らかとなった。

1. 不妊外来通院歴や流産歴のある妊婦は安静保持ができていたが、妊娠の自覚や受容ができていない初妊婦は安静保持ができていない。
2. トイレ歩行など安静度が正しく理解できていないことは安静保持を障害する。
3. 妊娠の自覚症状、またはそれに代わる切迫流産徴候の出現は安静保持の動機づけとなる。

## VI. おわりに

今回の研究により妊娠に対する知識や自覚、安静度の内容や家族構成が妊婦の安静保持に影響を与えることが明らかとなった。今後は、安静度の具体的説明、安静中の妊婦への日常的援助の見直し（買い物や家族への連絡などに対する配慮）を行い、より快適な入院生活とともに母性意識育成の発展のための援助を目指していきたい。

## 引用・参考文献

- 1) 新道幸恵他：母性の心理的側面と看護ケア, P109, 医学書院, 1990.
- 2) 市川 潤：妊産婦のこころの動き, 医学書院
- 3) 小野美砂子他：安静臥床妊婦の快適な入院生活への援助, 助産婦雑誌, 49(6), 1995.
- 4) 裏 和美他：切迫流産早産妊婦の基本的欲求、心理・社会的欲求を大切にされた看護ケア, 助産婦雑誌, 49(6), 1995.